で、揉み合ふまでも無く逃げ出して了ふ、判官長綱心は猛く思へども續く味方が無くなつたので、是非なくすご〳〵と唯一騎、南を指して退くところに、越中國の住人入善小太郎行重、好敵と見て取り、鐙を合せて駈け寄せ、馬を並べて無手と組んだ。

長綱は入善を引掴んで鞍の前輪に確と押付け、『何者なるぞ、名乗れ聞かう。』と聲を掛けると、敵は『越中國の住人入善小太郎行重生年十八歳』と名乘つた。長綱は、

『あゝ無慚、去年歿くした一子存命ならば今年十八歳になるものを……さらば一子供養の爲めに助け申さう。』

と入善を赦し、味方の勢を待たうと思つて、馬より下りて休んでゐた。入善も同じ處に疲れを休めて、二人打解けて物語つてゐたが、隙を見て入善は一刀抜く手も見せず、長綱の内兜をぐさと突き刺し、疼む所に入善が郎黨三騎ばかり駈付けて、遂に長綱の首を揚げた。

次に平家方より武藏三郎左衞門有國、三百餘人で突貫した源氏方より仁科高梨、山田次郎、五百餘人が打ち向ふ、有國は餘り深入りして馬を射られ、兜も打落され大童になつて、矢も射盡したので刀を抜いて戰つたが、七八筋矢を射立てられ源氏方を睨みながら立往生を遂げた。有國が討死すると、三百餘騎の武藏勢は忽ち總崩れとなつて引退く。

實盛最後

爰に武藏國の住人長井齋藤別當實盛は、赤地錦の直垂の上に、萠黃威の鎧を著、鍬形打つたる兜を冠り、黃金飾の太刀を帶き、二十四挿したる矢を負ひ、滋籐の弓を持ち、連錢葦毛の馬に金覆輪の鞍を置いて打乘つたるが、唯一騎踏止まり〳〵戰つた。之を見て、源氏方より手塚太郎進み出で、

『あゝ天晴勇ましい、如何なる御方なれば、唯一騎踏止つて戰はるゝぞ、名乘りたまへ。』

と聲を懸くれば、齋藤別當屹と見て、

『左樣いはれる貴殿は。』

『某は信濃國の住人手塚太郎金刺光盛。』

『さては互に好き敵ぢや。我は存ずる旨あつて名乗り申さず。但し貴殿を卑しむるには非ず、いざ寄れ、組まう手塚！』

双方馬を駈け寄する處に、手塚が郎黨は主を討たせじと、中に駈け入り、齋藤別當に無手と組んだ。

『むゝ、天晴汝は、日本一の剛の者と組んで討たれる果報者ぢやぞ。』

と言ひつゝ鞍の前輪に押附けて、ぶつりと首を掻切つた。手塚太郎は郎黨が討たるゝうちに、左手に廻つて、實盛が鎧の草摺を引上げ、二刀刺して弱る所を組み伏せた。齋藤別當は戰には疲れ、深傷では負ひ、其上老武者ではあり、手塚に組まれて下になり、遂に首を取られた。

手塚太郎は實盛の首を持つて義仲の前に出で、

『光盛今日、不思議の曲者を討取つて御座る。侍かと見れば、錦の直垂を着て居り、大將軍かと思へば、續く勢も無く、名乗れと云ふに、名乗りも致さず。聲は坂東聲で御座りました。』

義仲は其の首を見て、

『これは若し齋藤別當ではないか。併し別當なれば、義仲が上野に居た頃稚目に見た其時既に髪は半白であつたぞ、今は早七十にも餘つて居らうに、此首は髪も鬚も黑い。樋口次郎兼光は、別當と年來親しかつた間なれば見知つて居らう。檢めさせよ。』

召されて來た樋口次郎兼光は一目見るより、

『おゝ無慚、正しく齋藤別當で御座りまする。』

と云つて涙を落す、義仲は不審げに、

『髪の黑きは如何なる故か。』

『其を思へば實に哀れで御座りまする。先年のこと、實盛が申しまするには、我れ既に六十に餘つて、再び出陣する時あらば、髪鬚を黑う染めて若やがうと思ふなり、其故は老武者とて人に侮られんも口惜しく、さればとて若殿原と爭うて先縣けせんも大人氣なしと、某に物語つたことが御座りました。誠に染めたと見えまする、洗はせて御覽あれ。』

義仲は直に齋藤別當の首を洗はせて見た、いかにも髪も鬚も皆白髪となるのであつた。

又、齋藤別當が、大將の着るべき錦の直垂を著けてゐたのにも譯がある。宗盛に出陣の暇乞を述べる時、

『先年坂東に參つた時、某一人の事では御座りませぬが、水鳥の羽音に驚き、矢一筋射ずに富士川より逃上つたことは、老後の恥辱と存じて居りまする。此度北國の合戰には討死の覺悟を極めました。實盛は領地を賜はつて武藏の長井に住ひまするが、元越前國の者、故郷に錦を著て歸ると申すことが御座りまするゆゑ、此度錦の直垂著用の儀御免を願ひまする。』

と申したので、宗盛は優にやさしい事と感じて實盛に、錦の直垂を許したのであつた。

去ぬる四月十三日、十萬の大軍で勇み勇んで都を立つた平家の軍勢は僅か一月經つた五月下旬には僅か二萬許となつてすご〳〵と都へ歸つて來た。

北國の合戰に、親を討たれ、夫を討たれた平家方の遺族は、門戸を閉ぢ、朝夕鐘を打ち鳴らして、聲々に念佛を唱へ、喚き叫んで哀んだ。中にも上總守忠清、飛彈守景家は、清盛入道歿後、二人とも出家をしてゐたが、子供が皆北國で討死したと聞いて泣き暮らして嘆死をした。

六月一日、神祇權大副大中臣親俊を召されて、此度兵亂鎭定の上は、伊勢大神宮へ行幸あらせらるべしと仰せ出された。

垂仁天皇の御宇に、大神宮が大和國笠縫の里より、伊勢國渡會郡五十鈴の河上へ遷座あらせられて以來、歷代の天皇ごなたも伊勢へ行幸あらせられたことはなかつたが、天平十五年十月、左大臣不比等の孫、參議式部卿宇合の子、右近衞少將兼太宰少貳藤原廣嗣が、肥前國松浦郡で謀叛を起したとき、朝廷では大野東人を大將軍に任じ、廣嗣の追討を仰付けられた、其時天皇は御祈願の爲め、初めて伊勢大神宮へ行幸あらせられた。廣嗣は肥前の松浦と京都間を、僅か一日で往復す

る稀代の名馬を持つて居たが、官軍の爲め大敗を蒙つたので、其馬に乘つて唯一騎、海中へ馳せ入つて馬諸共溺死した。其の後彼の亡靈が現れて樣々の變異が起つた。それで天平十八年六月十八日、玄昉僧正を導師として、筑前國御笠郡太宰府の觀音寺で、亡靈調伏の供養を營まれた。

玄昉僧正が高壇に登つて鐘を打鳴らしてゐると、俄かに空が搔曇つて、雷が烈しく鳴り出し、其の雷が僧正に落ちかゝり、首を取つて空中に舞上つた。此僧正は吉備大臣に隨行して入唐し、法相宗を學んで來た人であるが、唐人は玄昉といふ名を見て、玄昉とは還つて亡ぶといふ音があると言つたさうであるが、果して非命に死んだ。翌十九年六月十八日、奈良の興福寺の庭に、玄昉と云ふ銘を書いた髑髏が落ちて來た。そして虛空で三百人ばかりの笑聲が聞えた。興福寺は玄昉僧正が弘めた法相宗の寺である。

玄昉の弟子共は髑髏を塚に納めて『頭墓』と名づけた。又廣嗣が亡靈は神と崇められて、肥前國松浦郡に祀られた。今の鏡宮がそれである。

木曾山門牒狀

木曾義仲は越前の國府に於いて部下を集めて評議を開き、

『近江國を經て都へ上洛するならば、例の叡山の僧徒が道を遮ぎるやも計られぬ、驅破つて通るは容易なれど、惡行を逞うする平家を討つて、都を守護せんとする義仲が、山門の衆徒と合戰に及んでは、平家の二の舞となる。之を避る方法はあるまいか。』

と諮るに、大夫坊覺明が進み出て、

『山門の三千の大衆、必ずしも一味同心とは限りませぬ。或は平家に同心せんと申す大衆も、或は源氏に加擔せんと申す大衆も御座りませう。兎も角も牒狀を御遣はしあつて、其の答に依つて樣子は分りませう。』

と云つたので、義仲も之に同意して覺明に牒狀を認めさせた。其の牒狀の大意は、

『義仲つら〳〵平家の惡逆を見るに、保元平治より以來長く人臣の禮を失ひ、恣

に帝位を進退し、飽くまで國郡を横領す。就中去ぬる治承三年十一月、法皇を城南の離宮に遷し奉り、博陸(關白)を海西の絶域に流し奉る。衆庶言はず、道路目を以てす。義仲、先日に高倉宮の令旨を賜はる。去年の秋、旗を揚げ劍を把つて信州を出でしより連戰連捷せり。是偏に神明佛陀の助なり、平氏敗北の上は、入洛を企つるなり。日ならずして叡岳の麓を過ぎて、洛陽の衢に入らんとす。此時に當つて、竊かに疑ふ所あり。抑天台衆徒は、平家に同心するか、源氏に與力するか。若彼の惡徒を助けらるべくば、衆徒に向つて合戰すべし。若し合戰を致さば、叡岳の滅亡踵を旋らすべからず。庶幾くば天台衆徒、神の爲め佛の爲め國の爲め君の爲め、源氏に同心して、凶徒を誅し、鴻化に浴せんことを。義仲恐惶謹言。壽永二年六月十日

慧光坊律師御坊へ。』

山門返牒

山門の大衆は此狀を披見して、案の如く平氏に同心せんといふ衆徒もあり、源氏に附かんといふ大衆もあり、異議區々であつたが、老僧達の意見では、

『我等專ら國家太平、聖壽長久を祈る、平家は今上陛下の御外戚、山門にも尊敬を致せども、多年の横暴は天下の憎む所である。源氏は近年度々の軍に討勝つて運命開くべき機運である、當山獨、何ぞ宿運盡きぬる平家に同心して、運命開くる源氏に背かうや。須く平氏値遇の義を翻へして、源氏合力の旨に任せたが好い。』

三千の大衆も之に同意して返牒を遣つた。義仲は部下の主立つ者共を召集して、覺明に返牒を開かせると、

『六月十日の牒狀、同十六日到來せり、凡そ平家の惡逆累年に及びて、朝廷の騷動を致す、然りと雖も一天久しく彼の妖逆に侵されて四海靜に其の安全を得ず。止むことなし。夫れ叡岳に到つては帝都東北の仁祠となして、國家靜謐精祈顯密の法輪無きが如し、擁護の神威屢廢る。茲に貴家適累代武備の家に生れて、豫め奇謀を運らして義兵を起し、一戰の功を樹つ。其名既に四海に流る。我山の衆徒且つ以て承悅す。此の如くならば山上の精祈空しからず、再び敎

法の榮えんことを喜ぶ、然れば卽ち命には十二神將、忝く醫王善逝の使者となして、凶徒追討の勇士に相加はり、惡侶治罰の官軍を助けしめん。云々。』

平家山門連署

平家は之を夢にも知らず、『興福、園城兩寺は鬱憤を含める折柄、語らふとも靡くまい。されど當家は山門との間に未だ怨を結んだことは無い、山門も亦當家に敵意を有する筈は無い。速かに山王大師に祈誓して三千の衆徒身方に爲たが可い。』と一門公卿十人、同心連署の願書を書いて山門へ送つた。

『敬つて申す延曆寺を以て氏寺に准じ、日吉社を以て氏社となして、天臺の佛法を仰ぐべき事。

右當家一族の輩、殊に祈誓することあり。旨趣如何となれば、叡山は是れ桓武天皇の御宇、傳敎大師入唐歸朝の後、圓頓敎法を此所に弘め、遮那の大戒を其内に傳へてより以來、專ら佛法繁昌の靈窟として、久しく鎭護國家の道場に備ふ。方今伊豆國の流人、源賴朝身の咎を悔いず、還つて朝憲を悔る。加之奸謀に與して同心を致す、源氏等義仲、行家以下、黨を結んで數あり。隣境遠境數國を掠領し、土宜土貢萬物を押領す。之に因つて或は累代勳功の跡を追ひ、或は當時弓馬の藝に任せて、速かに賊徒を誅し、凶黨を降伏すべき由、苟も勅命を含んで頻に征伐を企つ。玆に魚鱗鶴翼の陣、官軍利を得ず、星旄電戟の威、逆類勝ちに乘るに似たり。若し神明佛陀の加被にあらずんば、爭で反逆の凶亂を鎭めんや。如何に況んや臣等曩祖、思へば忝く本願の餘裔と謂ひつべし。彌崇重すべし、彌恭敬すべし。自今以後、山門に悅あらば一門の悅となし、社家に憤あらば一門の憤となして、各子孫に傳へて永く失墜せじ。藤氏は春日社、興福寺を以て氏社氏寺となして、久しく法相大乘の宗に歸す。平氏は日吉社、延曆寺を以て氏社氏寺となして、親圓實頓悟の敎に値遇せん。彼は昔の遺跡なり、家の爲め榮華を思ふ。此は今の精祈なり、君の爲追罰を請ふ。仰ぎ願はくば山王七社、王子眷屬、護法聖衆、東西滿山、十二乘願、醫王善逝、日光月光無二の丹誠を照らして、唯一の去應を垂れ給へ。然れば卽ち邪謀逆心の賊、各手を軍門に束ね、反逆殘害の輩首を京士に傳へん。仍て一門公卿等、異口同音に禮をなして、祈

誓如件。従三位行兼右近衛中將平朝臣通盛、従三位行兼右近衛中將平朝臣資盛、正三位行右近衛中將兼伊豫守平朝臣維盛、正三位行左近衛權中將兼播磨守平朝臣重衡、正三位行右衛門督兼近江遠江守平朝臣清宗、參議正三位皇太后宮權太夫兼修理太夫加賀越中守平朝臣經盛、従二位行中納言征夷大將軍兼左兵衛督平朝臣知盛、従二位行權中納言兼肥前守平朝臣敎盛、正二位行權大納言兼陸奥出羽按察使平朝臣頼盛、従一位前内大臣平朝臣宗盛。壽永二年七月五日の日

敬白。』

と書いてあつた。天台座主は之を看て、平家を氣の毒に思つて衆徒には披露もせず、十禪師權現の社壇に籠つて三日間加持をなし、其後に衆徒に披露をしたが、初めは少しも氣付かなかつた願書の上包に一首の歌が現はれてゐる。

『平かに　花咲く宿も　年ふれば
西へ傾く　月とこそ見れ。』

山王大師も憐み給うて、三千の衆徒力を合せよとの御意ではあつたが、平家年來の所爲が神慮に違ひ、人望にも背いてゐるので、祈れども叶はず、語へども靡かなかつた。大衆も亦平家今日の境遇に同情はするけれども、既に源氏に援助の返事を送つた上は、輕々しく變心もなり難く、一人として平家の懇願に應ずる衆徒もゐなかつた。

主上都落

同七月十四日（壽永二年）肥後守貞能、九州の擾亂を平げ、菊地、原田、松浦黨三千餘人を率ゐて上京した。九州は平定しても、東國北國は容易に鎭まらない。

美濃源氏に佐渡衞門尉重貞と云ふ者があつた。保元の合戰の時、戰に負けて落人となつた鎭西八郎爲朝を搦取つた賞として、右衞門尉に任ぜられ、源氏の一門からは憎まれて、其後平家に媚び諂つてゐた者である。この重貞が二十二日の夜半、六波羅へ馳付けて、

『木曾義仲北國より五萬餘騎を率ゐて攻め上り、楯六郎親忠、太夫坊覺明をして、山門三千の大衆を同心させ、唯今都へ亂入致しまする。』

と報告したので、平家の人々は大に騒いで、方々へ防禦の兵を出す、卽ち大將軍

新中納言知盛、本三位中將重衡は、三千餘人で山階へ進み、越前三位通盛、能登守教經は二千餘人で宇治橋を固め、左馬頭行盛、薩摩守忠度は一千餘人で淀路を守つた。

源氏方は、先づ十郎藏人行家が數千人を率ゐ、宇治橋を渡つて都へ入つて來た。陸奥新判官義康が子矢田判官義清が、大江山を經て入洛するといふことも聞え、又、攝津河内の源氏も同心して都へ亂入するといふ噂も聞えたので、平家方では最早致しかたがない、此上は一緒にどうにでも成る樣に成らうと、方々へ差向けた討手を皆呼び返した。

廿四日の晩、前内大臣宗盛卿は、建禮門院の居らせられる六波羅池殿へ參上して、

『義仲が既に北國より五萬餘騎を率ゐて攻め上り、江州坂本に到著し、山門三千の大衆をも同心させて、唯今都へ亂入するといふ註進が參りました。一門の人々は、何時までも都にゐて、如何ともならばなれと申して居りまするが、女院、二位殿を憂目にお遭せ申しては相濟みませぬゆゑ、法皇主上を奉じ、一時西海へ御幸行幸を仰ぎ申さうと考へて居ります。』

と申上げると、女院は御涙ながら、

『此上は如何樣にも足下の計ひに任せる。』

と仰せられたので、宗盛卿も直衣の袖を絞つて引下られた。

法皇に於かせられては、平家が法皇を擁して西國に奔らうとする策略を聞召され、其夜の中に按察使大納言資方卿の子右馬頭資時を御供に、竊かに院の御所を出でさせられ、御行方は解らなかつた。

平家の侍に橘内左衞門尉季康と云ふ者があつた。利口な男で平素院の御所の御用なども勤めてゐた。其晩御宿直にあがつて遠くの方にゐたが、何となく物騒がしく、宮女達の忍び泣く聲などが聞えたので、局近う忍び寄つて立聞きすると、

『俄にお姿が見えぬ、何處へ御幸あらせられたのであらう。』

など云ふ話が聞えた。季康は是は一大事と、急いで六波羅へ屆け出た。宗盛卿は多分何かの間違ひだらうと思ひながら、御所へ參上して見ると、實際、法皇の

御在所は解らないのであつた。御側に仕へる女達、二位殿、丹後殿も皆元のまゝであるが、誰一人御在所を知つてゐる者はない。據なく宗盛卿はすご〳〵六波羅へ歸られた。

この事が知れ渡ると、京中の騒ぎ、平家の人々の周章てやうは、銘々の家に敵が打入つたとしても此程には有るまいと思はれた。

此上は切めて行幸だけでも仰がうと、翌朝未明、御所へ御輿を差上げた。主上は御齢六歳でまだお幼さい、何心なく御母后（建禮門院）と共に御輿に召させられた。

『神璽、寶劍、内侍所（鏡神）、玉璽、玄上（琵琶）、鈴鹿（和琴）などを取忘れるな。』

斯樣に平大納言時忠卿が、其れ〴〵指圖をしたけれど、餘り周章騒いだ爲め、畫御座の御劍は取忘れて了つた。

やがて、時忠を初め、藏頭信基、讃岐中將時實父子三人、衣冠にて供奉し、近衛の武官や御輿曳の人々は、甲冑弓箭にて御供をして、七條を西へ、朱雀を南へ行幸あらせられる。明くれば七月二十五日星の光は消え、曉の雲が東にたなびいて、彼處此處鷄の音が聞える、路草の露には人々の涙もまじつて居たであらう。

攝政關白近衛基通卿も行幸の供奉をした。七條大宮通りで角髮結うた一人の童子が車の前を駈け抜けたのをちらと見たが、左の袂に春の日といふ文字が顯はれてゐた。春の日と書いて春日と訓む、さては春日大明神の守り給ふかと、頼母しく思うてゐると、童子の聲と覺しく、

『如何にせん　藤の末葉の　枯れ行くを
唯春の日に　任せたらなん。』

これを聞いた基通卿は、供の進藤左衛門尉高直を招き、

『行幸はあれど御幸はなく、主上法皇さへ別れ〳〵になりたまふ、世の行末如何にも頼母しからず覺ゆるが如何。』

と小聲で云へば、高直はそつと牛飼に目配せした。牛飼は心得て方向を換へ、大宮通を飛ぶが如くに走つて、北知足院へ車を入れた。

維盛都落

越中次郎兵衛は、基通卿が供奉を脱するのを見て、引留めようと焦思つたが、外

の人に制せられて追掛けることが出來なかつた。

小松三位中將維盛は、平生覺悟はしてゐたことながら、今日の日になつて見ると、流石に悲しい。維盛の奥方は故中御門新大納言成親卿の姫君で、世に稀な美人であつた。夫婦の間には六代と云ふ十歳の若君と八歳の姫君とがある。

奥方も若君も姫君も、一門の人々と一緒に西國へ落ちて行きたいと云つて泣かれる。維盛は、

『共に落ちたいは山々なれど、道にも敵があつて容易には通れまい。縱ひ吾が討死の便があらうとも、出家などゝ逸まらず、如何なる人の妻ともなつて、二人の子供を育てたまへ。廣い世間には情を知る人も有るものよ。』

と慰めても、奥方は返事もせずに唯だ泣いてゐた。いよ〳〵維盛が出立といふとき、

『都には父もなければ母もない私を、捨て行かせらるゝ上に、又如何なる人にも見えよとの御言葉は、情に似て怨めしう思ひまする。かねて何處までも御供申して、同じ野原の露とも消え、一つ底の水屑にもならうと仰せられたことは、皆空言となりました。それも身一つならば兎も角も、頑是ない子達を如何することが出來ませう。』

と袂に泣き縋れば、維盛は、

『誠に御身は十三、我は十五よりの契なれば、火の中水の底へも、共に入り、共に沈み、死出の旅へも後れ先立たじと思うてゐたが、今斯かる有樣にて軍の陣へ赴くことなれば、行方も知らぬ旅の空へ伴うて、憂目を見するには忍びられぬ。殊に今はその用意も出來ぬことゆゑ、何處の浦にも落着いて後、招び迎へることと爲よう。』

思切つて立ちあがり、鎧を著、馬引寄せて乘らうとすると、若君も姫君も走出で、

『何處へ御出でなされまする、私も行きまする。』『一緒に行かう。』と二人が泣き慕ふ。維盛は流石に振切りもされず、困り拔いてゐるところへ、弟新三位中將資盛、左中將清經、同少將有盛、丹後侍從忠房、備中守師盛の兄弟五人、騎馬のまゝ門内へ打入つて、庭に立ちながら、

『御輿は既に遙かに進ませ給ふに、何故今迄御遲參なるぞ。』

と馬上ながら大音に呼はつた。維盛も今はこれまでと若君姫君を掻退け、ひらりと馬に打乘つて立出でたが、又引返して緣際に馬を寄せ、弓の弭にて御簾を掻上げ、兄妹の子を示して弟達に、

『此の通り、子等等が餘りに慕ふのを、慰藉してゐたので意外の遲參を致した。』

と云ひながら、はら〳〵と落涙すれば、五人の叔父達も皆鎧の袖を濡らした。

爰に維盛の家來に齋藤別當實盛の遺兒、齋藤五、齋藤六と云ふ兄は十九弟は十七になる侍があつたが、左右より維盛の馬の轡に取附いて、

『何處までも御供致しまする。』

『いや、汝等の父實盛が北國下向の時、汝等を强ひて留置き、終に北國にて討死したるは、今日の事を兼て悟つて居たと見えるぞ。あの六代を留め置くにつけて賴みに思ふは汝等二人、外に力になる者は無い。枉げても留まつてくれい、六代の身を賴むぞよ。』

維盛が諭しに是非なく二人は後に殘つた。

奥方は維盛の後を見送り、

『年來日來、斯くまで情なき御方とは夢にも思はなかつた。』

と泣き伏して了つた。若君姫君侍女達は御簾の外まで轉げ出て、聲を限りに泣き叫ぶ。出て行く人の耳の底には、其の聲々が浸み込んで、何時までも消えないのであつた。

平家は都を落ち行く時、六波羅池殿、小松殿、八條、西八條、以下一門の邸二十餘ケ所侍どもの宿所其の外京白川四五萬軒の民家に火をかけて、一度に燒拂つた。

聖主臨幸

聖主臨幸の地も鳳闕空しく礎を殘し、后妃遊宴の庭も花木悉く灰と爲つてしまつた。六波羅池殿を初め、さしも多年の經營を盡くし輪奐の美を窮めた平家一門の大厦高樓、今は一宇も殘らない。保元の昔より花と榮えた平家、壽永の今は秋の楓と落ち果てた。

畠山庄司重能、小山田別當有重、宇都宮左衞門朝綱等は彼等の一族が賴朝に屬いたので先頃から監禁してあつた。平家都落ちの日、斬つて了はうといふ議も

あつたが、新中納言知盛が、

『縱ひ彼等百千人の首を斬つたとて、當家の運命に關係は有るまい。空じく彼等が首を斬つて、故郷に在る妻子眷族等を悲しませんより、助け遣はしたが可い。若し當家の運命再び啓けて都に還ることもあらば復お役に立つまいものでも無い。』

と主張して命乞ひをしてやつた。彼等は深く恩誼に感じて、

『何處までも御供願ひ奉る。』

と申出たが、

『汝等が魂は皆東國にあるものを、脱殼ばかり西國へ伴なふとも何の益も無い、速かに歸國致せ。』

と宗盛は言つた。彼等は命全うして故郷に歸るのは嬉しいが、是まで二十餘年も仕へた主人に別れるのは、又悲しい事であつた。

忠度都落

一旦都を立つた薩摩守忠度は、どうしてか、侍五人、僮一人、自分も共に皆甲冑に身を堅めた七騎、途中より取つて返し、五條三位俊成卿の邸宅へ行つて見ると、門戸が堅く閉ぢてある。

『薩摩守で御座る。忠度で御座る。』

と聲をかけると、

『さア落人が還つて來た。』

と門内では騒出した。薩摩守は急ぎ馬を下りて門際に立ち、

『三位殿に申上げて置きたい儀があつて忠度が參上致した。縱し門は開かれずとも、責めて此處まで御出で下され。』

と自ら高聲に申入れた。

『薩摩守ならば、苦しうない、入れ申せ。』

と俊成卿は門を開かせて對面した。

薩摩守は言葉靜かに、

『先年敎を請ひまして以來努々疎略には存じませぬが、此の二三年打續きての

兵亂に取り紛れて參上も相叶はず、此度主上既に帝都を出でさせ給ひ、一家の運命も早や盡き果てました。其れに就ては先年撰集の御沙汰あるべき由承はり、生涯の面目に一首なりとも御選に預りたいと存じ居りましたが、騷亂の爲め其の御沙汰もなくなり、誠に殘念に存じました。此後世靜まつて再び撰集の御沙汰も御座りました節、此の卷物の中より一首なりとも御選に預りましたならば、草葉の蔭にて如何計り嬉しう存じまする。』

と日頃詠んだ歌の中秀歌と思ふもの百首許書き集めた卷物を、鎧の隱しより取り出した。俊成卿は其を受取つて一讀し、

『この御忘形見を賜はつた上は、決して疎略には存じませぬ。さても、斯樣な時に斯樣な御訪問、感涙抑へ難う御座る。』

『此上は骸を野山に曝さば曝せ、西海の波に沈まば沈め、最早世に思置くことも御座りませぬ。さらば御暇。』

と一禮して、馬に打乘り、兜の緒を締め、主從七騎鞭を揚げ、西へ向つて落ち行いた。俊成卿は門外に立つて後姿を見送つてゐたが、薩摩守の聲と覺しく、

『前途程遠　馳思於雁山夕雲。』

と高らかに口誦むのが聞えた、俊成卿は感に堪へず涙をおさへて門に入つた。其後勅命を受け千載集を選むとき、此の時忠度の有樣、言つた言葉など思ひ出して懷舊の涙をこぼした、薩摩守の歌卷には幾らも名歌があつたけれど、朝敵の名が附いた身であれば、憚かつて名は顯はさず、『故郷の花』と云ふ題で詠んだ歌を一首、『讀人しらず』として選び入れた。

『さゝ浪や　志賀の都は　あれにしを
　昔ながらの　山櫻かな。』

經正都落

修理大夫經盛の嫡子、皇后宮亮經正は、幼少の頃、仁和寺御室の御所に、稚兒姿で仕へたことがあつたので、法親王へ御暇乞の爲め、侍五六騎を從へ、仁和寺へ馳せつけ、馬より飛び下り門を敲かせ、

『君既に帝都を出でさせ給ひ、平家一門の運命今日に盡き果てました。浮世に

思置くことは、唯君の御名殘ばかりで御座りまする。八歳の年此の御所へ參り、十三歳で元服致すまで、御側近く御奉公致ましたが、此度西海千里の波路に赴きますれば、何時又立歸る時の有らうとも覺えませぬ。責めて今一度親しく御姿を拜したうは存じまするが、甲冑を着し、弓箭を帶し、見苦しき樣になつて居りますれば、其儀は憚りまする。』

と申した。此の趣を取次ぎ申上げると、法親王は哀に聞召して、

『參れ。其裝にて苦しうない。』

と仰せられた。經正其の日は、紫地の錦の直垂に萠黄匂の鎧を着、長覆輪の太刀を帶き、廿四挿した矢を負ひ、弓を小脇に挾み、兜は脱いで背後に懸け、お庭に跪き畏まつた。やがて法親王出でさせられ、御簾を高く上げさせて、『是へ〳〵。』と召させられたので、經正はお縁側まで上つた。從騎の藤兵衞尉有教を召ぶと、赤地の錦の袋に入れた御琵琶を持つて來た。經正は之を御前に差し出し、

『先年下し置かれた御琵琶『青山』を持參致しました。名殘は盡きませぬど、も、斯樣な名器を戰陣の巷に毀はんこと恐れ多く存じ、返納致しまする。若し運命啓けて、再び都へ立歸ることもあらば、其時重ねて下し置かれたう存じまする。』

法親王は哀に思召されて、一首の御詠を下し賜はつた。

『あかずして　別るゝ君が　名殘をば
後の形見に　裏みてぞ置く。』

經正も御硯を拜借して、一首を書いた。

『呉竹の　筧の水は　かはれども
猶すみあかぬ　宮の内かな。』

やがて、經正御前を退ると、寺中の人々皆名殘を惜んで袂に取縋り、涙を流す。中にも幼少の頃から一緒に居た大納言法印行慶は、餘りの名殘惜しさに、桂河の川端まで送つて來て、涙ながら、

『あはれなり　老木若木も　山櫻
おくれ先だち　花は殘らじ。』

經正の返歌は、

『旅衣　よな〳〵袖を　かたしきて
　思へば我は　遠くゆきなん。』

さて、今迄捲いて持たせた赤旗を、さつと指上ぐれば、此處彼處に控へてゐた侍共、ばら〳〵と駈け集つて百騎許り、鞭をあげ駒を早めて程なく行幸の御輿に追附いた。

青山沙汰

仁和寺から經正に『青山』を下賜されたのは、經正が十七の年、勅使として宇佐八幡宮へ下る時であつた。

經正が宇佐八幡の神殿に於て、此の名器を彈じて秘曲を奏すると、並び居る神官、心なき奴までも感涙を流して聽いた。

抑この『青山』と申す琵琶は、昔仁明天皇の御世、嘉祥三年三月に、掃部頭貞敏が唐に渡つた際、唐の琵琶博士廉承武より三曲の秘傳を授かり、且つ玄象、獅子丸、青山、三面の琵琶をも讓られた。然るに歸航の洋上に於て、龍神が此名器を欲しがつたものか、浪風荒く立つたので、獅子丸は海に投じて龍神に獻じ、殘る二面の琵琶を携へ歸つて、朝廷に上り長く帝室の寶物となつたのである。

村上天皇の應和の頃、月の好く冴えて風の涼しい秋の夜半に、帝は清涼殿に於て『玄象』を彈じてお在になつたが、忽然として影のやうな者が御前に現はれて、優に氣高い聲で歌を唱うた。

帝は暫く御琵琶を彈罷めて、

『汝は何者か。何處より參つた。』

と仰せられると、彼の者答へて、

『私は昔貞敏に三曲を傳へました大唐の琵琶博士、廉承武と申す者で御座りまするが、三曲の中に秘曲を傳へ殘しました罪に依つて、魔道に沈淪みまして御座りまする。今、君の御撥音の妙なるに感じて暫く浮び出でました、願はくば傳へ殘した彼の秘曲を、今、君に授け奉つて罪障を滅し、佛果菩提を得ようと存じまする。』

と申上げ、御前に立てゝあつた『青山』を取上げ、轉手を捻ぢて調子を合せ、帝

に授け奉つたのが、三曲の中の上玄石上といふ秘曲である。

斯樣な不思議が有つた以來、恐れ憚つて此の『青山』を彈ずる者は無くなつた、其後帝より仁和寺に御寄附になつてゐたのを、經正は法親王最愛の童子であつたので頂戴したのである。

此の琶琶は甲は紫藤の木、撥面には夏山の綠の樹間より有明の月の出てゐる圖を畫いてあるので、『青山』と名づけられた。

一門都落

池大納言頼盛は、池殿に火を放けて立ち出でたが、鳥羽の南の門まで行くと、忘れた事があつたといつて、鎧に附けた赤印などかなぐり捨てさせ、三百餘騎で都へ引き還した。

これを見た越中次郎兵衛盛續は、宗盛の前に駈行き、馬より飛下り畏つて、

『あれ御覽あれ、池殿が都へ引還されるので、多くの侍も附いて行きまする、不都合千萬な次第、池殿迄は恐れ多う御座りまするが、せめて侍どもに矢一つ射懸けてくれませう。』

と憤慨した。宗盛は首を振り、

『今、此の場合を見捨てる樣な不人情な者は構ふに及ばぬ。打棄てゝおけ、其よりも小松殿の人達は如何ぢや。』

『未だ一方もお見えになりませぬ。』

『都を出て一日も經たぬうち早、人々の心が變るとは淺ましいものぢやな。』

と宗盛が長歎すると、新大納言知盛は、

『斯樣な事もあらうかと思へばこそ、都に踏留まつて如何樣にも成らせられいと、あれ程申上げたに。』

と殘念さうに、宗盛の顏を見るのであつた。

池大納言頼盛が、平家の一門を見捨てゝ都に留まつたのは、平素頼朝から、

『某は貴殿を御母公禪尼殿と思ひ、御恩を感じて、決して疎かには思ひ申さぬ。八幡大菩薩も御照罰あれ、此言葉に僞無し。』

と度々誓狀を以て鎌倉より申して來、又平家追討の討手の上るごとに頼朝は

毎時も、

『池殿の侍に向つては、決して敵對するな。』

と觸れさせ、十分好意を表してゐたので、今は頼朝に助けられようといふ氣になつて、忘物があると云つて中途から引返したのであつた。

そして、頼盛は仁和寺の常盤殿に潜んでお在になる八條女院の御許へ參つて身を隠した。頼盛が妻の宰相が、女院の御乳母たる縁故があつたからである。

『萬一の場合には何卒御助け下さるやう。』

と頼盛が申上げると、女院は、

『世が世であらば。』

と頼み少なう仰せられた。頼朝は好意を有しても、其外の源氏は如何か判らないのに、なまじ一族に引き離れて居殘つた頼盛は、浪にも磯にも孰にも附かぬ不安な心持で暮してゐた。

さて、小松殿の兄弟六人、其勢都合一千餘人は、淀の六田河原でやつと追附いた。宗盛はさも嬉し相に維盛に向ひ、

『何故今まで御遲參なされたか。』

『子供から餘りに慕はれて、其をすかすに思ひの外遲參を致しました。』

『六代殿は又何故に御連れなさらぬ。能くも心強く殘されたものぢや。』

『行末餘り頼母しうは存せられぬ故で御座る。』

と答へて維盛は涙を押へた。

斯くて落ち行く平家の人々は、前内大臣宗盛、平大納言時忠、平中納言教盛、新中納言知盛、修理大夫經盛、右衛門督清宗、本三位中將重衡、小松三位中將維盛、同新三位中將資盛、越前三位通盛。殿上人には藏頭信基、讃岐中將時實、左中將清經、同少將有盛、丹後侍從忠房、皇后宮亮經正、左馬頭行盛、薩摩守忠度、武藏守知章、能登守教經、備中守師盛、尾張守清經、淡路守清房、若狹守經俊、藏人大夫業盛、經盛の三男大夫敦盛、兵部少輔正明。僧侶には二位僧都專親、法勝寺執行能圓、中納言律師仲快、經誦坊阿闍梨祐圓。武士には受領、檢非違使、衛府諸司尉百六十人、都合其勢七千餘人、何れも此の三ヶ年の間、東國北國度々の合戰に討ち漏らされ、纔に殘つた人々である。

平大納言時忠は、山崎關戸院に主上の御輿を停めさせ、男山の方を伏し拜み、

『南無歸命頂禮八幡大菩薩願はくば君を初め奉り、我等を今一度都へ入れさせ給へ。』

と祈願を籠めた。

都の方を顧みれば、もう何も見えぬ、霞んだやうな空に燒殘りの烟であらう、幾條か心細くも立騰つてゐる。之を眺めて詠んだ歌。

『はかなしな　主は雲井に　隔つれば
宿は　煙と　立上るかな。』　中納言敎盛

『故郷を　燒野が原と　かへりみて
末も　煙の　浪路をぞ行く。』　修理大夫經盛

肥後守貞能は、先頃淀の川尻に源氏方が起つたと聞き、蹴散らさんと五百餘騎を率ゐて向つたが、虛報であつたので取つて歸す途中、宇度野の附近で都落の人人と行逢つた。貞能は急ぎ馬より飛び下り、宗盛の馬前に畏まり、

『これは何地へ赴かせられまする。若し西國へ御下りあらば、落人として此處彼處にて追ひ立てられ、却つて御名を汚し給はんことは口惜しう御座りまする。如何樣に爲らせられうとも、都を御立退きは然る可らずと存じまする。』

『いや〳〵、義仲既に北國より五萬餘騎にて攻上り、比叡山、東坂本に滿ち〳〵て居る。法皇も、既に御行方も知れず。如何ならうとも都に留まらうと申す者もあつたが、女院、二位殿に憂目を見せ申すが我身に取つては口惜しくて、行幸を仰ぎ奉り、一先づ西國へ落ち下り、暫く時節を待たうと思ふぞ。』

『左樣なれば貞能はお暇を戴き、都の中にて如何やうにも爲りませう。』

と五百騎の兵は維盛等に附け、手勢僅かに三十騎を率ゐて都へ取つて返し、西八條の燒跡に大幕引かせて一夜を明かしたが、平家の公達誰一人引返して來る者も無かつた。此上はせめて、源氏の駒の蹄に懸けさせまいと、小松内大臣の墓を發き、白骨に向つて涙ながら、

『御一門の御果御覽あれ。生ある者は必ず滅す、樂み盡きて悲み來るとは、昔より申す事ながら、親り其を見るのは如何にも辛い事で御座りまする。君は斯くある事を悟らせられ、神佛に御祈誓あつて、自ら御命を縮めさせられたためで

御座りませう。あゝ、其時貞能も、後世の御供致すべきで御座りましたものを、生きて斯樣の憂目に逢ふのが口惜しう御座りまする。相果てましたらば必ず一佛土、何卒御側に御召し下されませ。』

と泣く〳〵搔き口説いて、白骨は高野へ送り、傍の土は賀茂川へ流させて、東國の方へ落ちて行つた。

平家の人々は、維盛の外は宗盛以下皆妻子を連れて行つたが、中以下の者などは已むを得ず都に打棄てゝ置いた。

福原落

平家はやがて福原に著いた。宗盛は老少數百人の侍共を集めて、

『我が平家の家運衰へて、神明にも放たれ、法皇にも捨てられ、帝都を出でゝ旅泊に漂ふことゝなつては、何の頼みか有るべきなれども、一樹の陰に宿り、一河の流を掬ぶも前世の契淺からずといふに、況して汝等は累代の家人、或は近親の好みがある、一時の榮枯に依つて離合する門客とは、情誼自ら同じくない。加之正統の天子、三種の神器を擁してお在すことなれば、如何なる野の末山の奥までも、行幸の御供申上げ、吾等と死生を共にする所存は無いか、如何に。』

と云ふと、侍共は感に迫つて、

『禽獸すら德に酬ゆる事あるに、人として恩を知らずに相濟みませうや、弓馬の道にたゞさはる者は二心あるが何よりの恥、特に此の二十餘年が間、妻子を育みましたは、皆御家の御恩で御座りまする。たとひ日本の外、高麗、契丹、雲の際、海の底までも行幸の御供仕り、如何樣にも相成りまする覺悟で御座りまする。』

と涙を拂つて異口同音に申したので、宗盛始め頼母しく思うた。

其夜は福原に一泊した。秋の夜の靜かに更けて、下弦の月が冴え渡る、何時歸るあても無い旅だと思ふと、誰の枕も涙に濡れて睡られない。

人も吾も起き出でゝ、そこら歩きまはる、故相國入道の經營されて、一時は帝都ともなつた福原も、變り果てゝ了つた。春は花見の岡御所も、秋は月見の濱御所も、泉殿、松蔭殿、馬場殿、雪見の御所、萱の御所、其外人々の館など、五條大納言國綱卿が承まつて造進した里内裏も、草蓬々と、見る影もなく荒れ果てゝゐる。見る物

毎に涙の種であつた。

明くれば壽永二年七月二十六日、福原の内裏に火を懸けて、主上を始め奉り、平家の一門、上下合せて七千餘人、悉く船に乘つて西海へ向ふ。

木版彫刻　長谷川香木

木版彫刻　前田剛二

木版彫刻　大倉牛兵衛

木版彫刻　五島德次郎

木版彫刻　岡田清二郎

木版印刷　西村熊吉

活版　報文社

製本　金子督太郎

大正三年九月十五日印刷
大正三年九月二十日發行

金參圓

著作者　澁川玄耳
東京市麹町區平河町五丁目五番地
發行者　金尾種次郎
東京市麹町區有樂町二丁目一番地
印刷者　中村政雄
東京市麹町區有樂町二丁目一番地
印刷所　報文社

著作權所有

發兌元
東京市麹町區平河町五丁目五番地
金尾文淵堂
（振替貯金東京三八一二七番　電話麹町二〇九四番　三五番）

文淵堂三大新譯

與謝野晶子女史著
中澤弘光氏裝幀及彩畫

□新譯源氏物語　上卷　特價金貳圓五拾錢
□新譯源氏物語　中卷　特價金貳圓五拾錢
□新譯源氏物語　下卷の一　特價金貳圓五拾錢
□新譯源氏物語　下卷の二　特價金貳圓五拾錢
□新譯榮華物語　上卷　特價金貳圓五拾錢
□新譯榮華物語　中卷　特價金貳圓五拾錢
□新譯榮華物語　下卷　特價金貳圓五拾錢

渡川玄耳氏著
中澤弘光氏裝幀及彩畫

□新譯平家物語　上卷　特價金貳圓五拾錢
□新譯平家物語　下卷　特價金貳圓五拾錢

金尾文淵堂藏版

913.45
SH21
1

終